

## 心理学部における帰属感情高揚プログラム「心理学と私」

心理学部 発達教育心理学科 川上 正浩  
 心理学部 臨床心理学科 坂田 浩之  
 心理学部 ビジネス心理学科 佐久田祐子  
 心理学部 臨床心理学科 奥田 亮

**要旨：**入学初期に学科に対する帰属感情を高めることが、その後の大学生活に充実感を抱くことにつながる、というこれまでの研究知見をふまえ、筆者らは1回生たちの学科に対する帰属感情を高揚させるプログラムの開発・実施、およびその効果の検証を行ってきた。教員に親密感を感じることや、上回生や卒業生とのつながりを感じることで帰属感情が高まると考え、学生生活や学科での学び(心理学)に関する在学生・卒業生へのインタビュー・VTRと、学科教員の鼎談によって帰属感情高揚プログラムを構成した。過去3年間にわたってVTRや鼎談などの素材の構成を変えつつ実施された3種類のプログラムの効果について比較検討したところ、教員の鼎談の効果があることが窺われる一方で、在学生・卒業生インタビューのVTRの効果は不安定なものであることが明らかになった。今後のプログラム開発では、先輩達の成長する姿を1回生が身近に実感できる内容にするなど、VTRの効果をもより安定したものにすることが必要と考えられる。

**キーワード：**大学生活充実度、初動教育、帰属感情高揚プログラム、SoULS-21、特別授業

### 1. はじめに

「大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である」との認識から、筆者らは大学で初動教育の一環として行われている宿泊・研修型の新入生オリエンテーション(本学では“学外オリエンテーション”と呼ばれているが、以下これらを総称してFOP[Fresher Orientation Program]とする)を取り上げ、その特徴や効果等について過去8年間にわたり継続的に調査研究・発表をおこなってきた(佐久田・奥田・川上・坂田, 2003; 奥田・川上・坂田・佐久田, 2003; 川上・坂田・佐久田・奥田, 2004; 坂田・佐久田・奥田・川上, 2005; 坂田・佐久田・奥田・川上, 2007; 佐久田・奥田・川上・坂田, 2008など)。筆者らがFOPに着目してきたのは、それが大学に入学して約2週間後という適応上重要な時期に、相応の経費および教職員・上級学生スタッフの労力をかけて実施されている行事であることから、その効果について実証的に調査する必要性があること、そして仮に一定のコストを伴うとしても、この(わずか)2日間のプログラムがその後4年間にわたる学生生活に対して肯定的な影響をもたらすのであれば、非常に効率の良い初動教育的行事であり、そのメリット

は十二分に活かされるべきであると考えたからである。そのためには、FOPにおけるどのような要素が(またはFOPにおけるどのような経験が)、その後の大学生活のどのような側面に肯定的な影響を与えるのかを調べ検討せねばならない。

このような目的意識を持ってなされた筆者らの一連の研究において、当初心理学科の1回生のみを対象として行われた調査は、その後縦断的(4回生に至るまでの大学生活充実度を調査)にも横断的(2007年度には本学8学科の1回生を対象に調査)にも対象を拡大しつつ、分析が重ねられてきた。そして集積されたデータから得られた結果の一つが、「FOPにおいて学科への帰属感情が高揚することで、その後の大学生活の充実感が高まる傾向が見られる」というものであった(坂田他, 2007; 佐久田他, 2008など)。この結果に着目し、筆者らは本学2008年度特別研究助成を受けて、学生の大学・学科に対する帰属感情を高めるプログラム、すなわち「帰属感情高揚プログラム『心理学と私』」を企画・実施した。つまりFOP外で初動教育に関する別の企画として、学生に効果的なプログラムを開発しようと試みた。プログラムの内容は、本学心理学科の上回生・卒業生が学科や大学生活について振り返り

つつ様々な観点からコメントして1回生にメッセージを送る映像や、ゼミでの学びの風景の映像を1回生に呈示し、さらに学科教員3名が鼎談の形で自らの心理学の学び(きっかけや大学生活)について語るというものである。その後、プログラムの効果を検討して(川上・坂田・佐久田・奥田, 2009; 川上・坂田・佐久田・奥田, 2010; 川上・坂田・佐久田・奥田, 2011)、1回生に呈示する刺激(映像や鼎談)・実施時期などを変更しプログラムを改良することを試みながら、現在までこの帰属感高揚プログラムを毎年度継続的に特別授業として実施している。将来的にこの帰属感高揚プログラムの有効性が十分に確認されれば、FOP等において活用されることで、広く大学初動教育に貢献することができると思われる。

そこで本報告では、2008年度～2010年度までに実施された帰属感高揚プログラムの内容と成果を振り返り、今後のさらなるプログラム開発に向けての方針を検討することを目的としたい。

## 2. 帰属感高揚プログラム「心理学と私」の内容

### 2.1. プログラムのねらい・構成と準備

帰属意識を高めることは、つながりを形成することである。反対に教員に親密感を感じることは、上回生や卒業生とのつながりを感じることは帰属感を高めると予想される。また「私はなぜここにいるのか/私が大学で過ごす意義は何か」という問いに対する答えが各個人内に位置付けられれば、大学生活は充実したものになる。

したがって、プログラムは以下の3点をねらい構成された。(1) 学生の帰属意識を高めること。(2) 心理学を学ぶこと、心理学科(心理学部)で学ぶことの効用を伝えること。(3) 教員に対する親密感を高めること。

上記のねらいを達成するため、プログラムは、心理学とのかかわりに関する卒業・在学生へのインタビュービデオ(VTR)と教員の語り(Talk)から構成された。

VTRは以下の3つの方法によって作成された。

一つ目は、在学生や卒業生の心理学・大学生活・樟蔭女子大学・1回生に対するコメントのVTRである。すなわち、「心理学を学ぼうと思ったきっかけ」「心理学に対する印象の変化」「心理学を学んで良かったこと・役立ったこと」「学生生活で一番心に残ったこと・しんどかったこと」「樟蔭女子大学に来て良かったこと」「1回生へのメッセージ」に関して、在学生あるいは卒業生が一問一答インタビューに答えた内容を素

材として収集した。

一問一答インタビューは以下の方法で実施された。在学生あるいは卒業生には、あらかじめ具体的な質問の内容を知らせず、一問一答式のインタビューに答えて欲しいとのみ依頼し、許可を得てVTR撮影装置の前に着席を求めた。そのうえで筆者らがA4の用紙に印刷した質問項目をフリップのように順次在学生あるいは卒業生に呈示していった。したがって、在学生あるいは卒業生の回答は、熟考されたものというよりは、まさにその場で思いつかれたものであったと言える。これらを適宜編集し、在学生であればインタビュー時の学年と所属ゼミ、卒業生であれば卒業生であることと所属(卒業)ゼミをテロップで付加し、各質問について3分程度のクリップを作成した。インタビュー内で語られた具体的な内容の一部を表1に示した。

二つ目は、ゼミ風景のVTRである。これは、実際ゼミが行われている現場に撮影装置を持ち込み、様々な形態(グループでのディスカッション、口頭でのプレゼンテーション、個人ごとの論文作成作業過程)の授業風景を撮影したもので、これも3分程度のクリップにまとめた。

三つ目は、卒業生の活躍VTRである。卒業して様々な職種(臨床心理学系の大学院で研修中、大学院修了後の研究職、銀行員、一般企業事務職)に就いている卒業生に依頼して、実際に職場で働いている様子を撮影し、また、職場で在学生あるいは卒業生インタビューと同様の一問一答式のインタビューを実施した。これらを適宜編集し、職場で働いている風景はそれぞれ5分程度、インタビューについては全体で3分程度のクリップにまとめた。

教員のTalkについては、特段打合せをせず、ライブ感を大切にしよう心がけ、3名の教員が参加して、鼎談の形をとった。教員自身が心理学を学んだきっかけ、教員それぞれが考える心理学を学ぶ意義やその途中で越えなければいけないハードルなどについて、フリートークの形式で話した。具体的なTalkの例を表2に示す。

### 2.2. プログラムの実施手順

上記の素材・内容を組み合わせて、プログラムが構成された。はじめにプログラムの導入・内容説明を行なった後、在学生や卒業生のコメント、ゼミ風景、卒業生の活躍、といったVTRを組み合わせて1回生に呈示した。それぞれのVTR映像を上映(呈示)した後は、教員が1分から3分程度、当該VTRで触れら

れていた内容について口頭で適宜解説した。VTRのうち、「1回生へのメッセージ」は在學生や卒業生から1回生に語りかける内容であり、他のVTRに比べてさらにメッセージ性が高い素材であると考えられたため、最後に呈示することにした。一連のVTR呈示を終えた後、教員のTalk(鼎談)を30分ほど行った。その後に1回生からの質疑応答に答えた。

プログラム終了時にはプログラムの効果を測るために、VTRの印象評定や大学生生活充実度、帰属感を測定する質問紙、および自由記述による感想用紙への回答を求めた。ただし、2009年度までは主にVTRの効果測定をねらいとしたため、教員の鼎談を行なう前に質問紙を実施しており、2010年度のプログラムのみ、教員のTalkを含んだ1回生のプログラムに対す

表1 在學生・卒業生の一問一答インタビューでのコメント

心理学を学ぼうと思ったきっかけは？	
卒業生 認知心理学ゼミ	自分がわからなかったから、まず自分ってなんやろう、ってところから心理学に興味を持ちました。
卒業生 産業心理学ゼミ	もともと父親が精神保健福祉士をやっていたので、ちっちゃいときから興味はあったと思っています。
4回生 人格心理学ゼミ	小学校の時から、カウンセラーの人とかと関わっていたからです。
4回生 健康心理学ゼミ	私は本当は児童学科に行きたかったんですけど、行けなかったので心理学科に来ることになったんですけど、今では来て良かったと思っています。
心理学を学んで心理学の印象は変わりましたか？	
卒業生 産業心理学ゼミ	心理テストとか、っていうイメージの方が強かったんですけど、企業の中でも消費者に向けての心理学とか、そういうことなんかで普段の日常でいろんなことに使われている、っていうのが発見できました。
4回生 発達心理学ゼミ	とても、入ってみると統計があったり、理系な感じでびっくりしました。
卒業生 障害児心理学ゼミ	ああ、はい、変わりました。心理学イコールカウンセラーみたいな、そういうイメージがあったんですけど、そんなことなく、もっと、広くて、奥が深い、難しいものがあるなあと思いますね。
4回生 健康心理学ゼミ	印象はすごく変わりました。血液型占いとかすごい信じちゃう方だったんですけど、それはちょっと、後で学ぶと思うんですけど、血液型は鵜呑みにしちゃいけないとか、なんかそういうことを学びました。
学生生活で一番心に残っていることは？	
卒業生 認知心理学ゼミ	文化祭、あ、でも、ゼミ旅行も。
4回生 知覚心理学ゼミ	日常生活で、お昼休みとかにみんなでわあわあきやあきやあ、くだらない話をしていることが残っています。
卒業生 産業心理学ゼミ	4年間でいろいろ、本当にたくさんのことがあったので、どれが一番というのはないですね。どれもこれも大切な、印象に残っていることです。
卒業生 環境心理学ゼミ	大学3回生の時にやったインターンシップです。知的障害児の通園施設に2週間の実習に行かせていただいて、それが今の自分の仕事の基盤になったかな、と思います。
3回生 人格心理学ゼミ	学外オリエンテーションのスタッフとかです。
樟蔭に来て良かったことは？	
4回生 発達心理学ゼミ	熱心な先生方がいっぱいいらっしゃるの、それにすごく影響されて勉強しようっていう気になります。
3回生 人格心理学ゼミ	女性ばかりなので、何でもオープンにしゃべれて、相談にも乗ってもらったり、友達がたくさんできることです。
卒業生 産業心理学ゼミ	人間関係が広がって、最高の友達に恵まれたことです。
卒業生 発達心理学ゼミ	先生との距離が近いので、卒業してもちよいちょい遊びに来れることです。
学生生活で一番しんどかったことは	
卒業生 産業心理学ゼミ	直近だとやっぱり卒論がすごく大変だったんですけど、でも、一回生の時の統計とかレポートとかはすごく大変でした。でも、それをやってたからこそ、卒論も大変だなと思いつながりながらできたんだと思います。
卒業生 健康心理学ゼミ	一人暮らしをしているので、初め、その、一人で全部生活をやっていくのがしんどかったです。
3回生 人格心理学ゼミ	入学した頃は友達もいてなくて、すごい人間関係ですごく悩んだ。
3回生 人格心理学ゼミ	しんどかったことは、やっぱり定期テスト…の勉強とかです。
心理学を学んで良かった・役に立ったことは？	
4回生 発達心理学ゼミ	なんかベタですけど、広がりました、自分が。
卒業生 人格心理学ゼミ	心理学を学んで、相手の立場に立って考える、っていうことをやっぱり心がけるようになりました。
4回生 健康心理学ゼミ	まず、自分のことが考えられるようになりました。いろいろな実験とか性格検査などをして、自分がどういうふうな傾向があるとか、どういう人間だとか、ということを考えられるようになりました。
卒業生 認知心理学ゼミ	自分をコントロールできるようになった。
一回生へのメッセージ	
4回生 人格心理学ゼミ	一回生が一番しんどいけど、後々、学校は楽しくなります。
卒業生 認知心理学ゼミ	やっぱり4年間は長いんですけど、それなりに得るものはたくさんあるんで、今が一番、自分を信じて進んでいって欲しいと思います。
4回生 知覚心理学ゼミ	これからほんとに楽しいことが、これからっていうか、これからはほんとに楽しいことがたくさんあるんで、心理学のもっと深いところを学んでいけるようになるんで、是非積極的に取り組んでください。
4回生 人格心理学ゼミ	大学は自分で動くことによって、もっと楽しくなると思います。

る反応データを採取している。

その他にも各素材や内容の構成を模索しながら、2008年度～2010年度の間に、構成の異なる3つの種

類のプログラムが実施された。2008年にはプログラムA、2009年にはプログラムAとプログラムB（それぞれ別の集団を対象）、2010年にはプログラムMixed

表2 教員のTalkの例

<p><b>教員のTalk(イントロダクション)</b>                  『…この授業は何のためにやっているかという、…(中略)…ある意味では学生生活に現実味ができてきたところではないかと思うんだけど、いろいろと思っていることがある時期なのではないかと思っています。たとえば、自分の思っていた心理学ってこんなものではなかった、とか、最初はやる気に燃えていたけど、そうでもなくなってきた、とか、いろいろな思いを持っている時期ではないかと思えます。なので特に先輩とか教員が心理学というものを学んで、心理学とどう関わってきたのかというようなことをいろいろとお話をする機会をもちたいということで、こういう場を設けました。…』</p>
<p><b>教員のTalk(教員自身のきっかけ)</b>                  『…僕らの頃っていうのは、今よりもずっと心理学っていうのはマイナーな学問で、心理学というものがあるということ自体を知ったのは、そうですね、高校の僕だったら2年生くらいになってから、というような形になります。…(中略)…僕は中学校の時に生徒会で、どういんですかね、生活委員長というのをやっていたんですね。いわゆる風紀委員長みたいな、校則を守らせるという、そういうのをやっていたんです。…(中略)…だけどやっぱり生徒達は皆さんそんな校則なんてくだらないみたいな感じでやってくるわけで、僕は、みんな生徒達の気持ちっていうのもやっぱり同じですからわかるし、だけど、先生から校則を守らせて下さいとかいうようなところでものすごく葛藤したんですね。悩みました。どうしたら良くなっていくのかなあというようなことをすごく悩んだ時期がありました。そういうのでいろいろやっていたんですけども、結局その校則とかそういうルールみたいなもので人を良くしていくって言うのは限界があるなあというのをものすごく痛感しました。そこでこういういろいろ考えていく中で出会ったのが心理学だったということになるのかと思います。心理学も学んでいくと最初はどちらかというと集団心理学とかそういう社会心理学系のことに関心があったんですけど、どうも見ていくとそういうカウンセリングをするというような領域が心理学にはあるんだということに気がついていきました。…』</p>

表3 各プログラムの構成

プログラムA			プログラムB			プログラムMixed		
分類	内容	時間(分)	分類	内容	時間(分)	分類	内容	時間(分)
Talk	導入・内容説明	5	Talk	導入・内容説明	5	Talk	導入・内容説明	3
VTR	きっかけ	4	VTR	卒業生の職場(研究所)	5	VTR	きっかけ	4
VTR	印象の変化	5	VTR	卒業生の職場(銀行)	4	VTR	印象の変化	5
VTR	学んで良かったこと・役だったこと	5	VTR	卒業生の職場(一般企業事務)	6	VTR	学んで良かったこと・役だったこと	5
VTR	心に残ったこと・しんどかったこと 権威に来て良かったこと	8	VTR	卒業生の職場(クリニック)	6	VTR	心に残ったこと・しんどかったこと 権威に来て良かったこと	8
VTR	ゼミ風景	5	VTR	心に残ったこと	4	VTR	ゼミ風景	5
VTR	一回生へのメッセージ	3	VTR	ゼミ風景	5	VTR	卒業生の職場(研究所)	6
	質問紙実施	10	VTR	一回生へのメッセージ	3	VTR	一回生へのメッセージ	3
Talk	教員自身のきっかけ(鼎談)	30		質問紙実施	10	Talk	教員自身のきっかけ(鼎談)	30
	質疑応答	8	Talk	教員自身のきっかけ(鼎談)	30		質疑応答	5
	感想の記入	5		質疑応答	5		質問紙実施	10
				感想の記入	5		感想の記入	5
	計	88		計	88		計	89

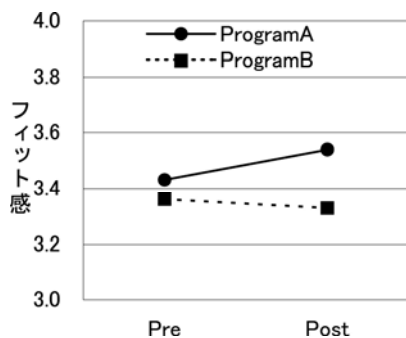


図1 プログラムA・B前後のフィット感

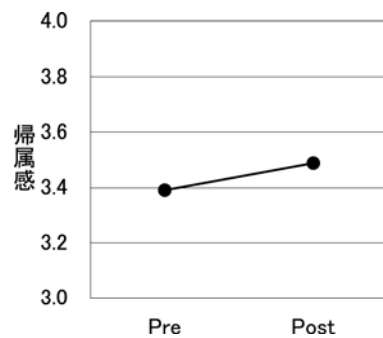


図2 プログラムMixed前後の帰属感

(プログラム A とプログラム B の混成) がそれぞれ実施されている。各プログラムの具体的な構成を表 3 に示す。

### 3. 各プログラムおよび VTR 素材の効果検討

これまで実施された 3 種類のプログラム A、B、Mixed の効果を検討するために、VTR の印象、プログラム実施前後での大学生生活充実度および大学への帰属感の変化について比較を行った。なお、分析に用いたデータは 2009 年および 2010 年のものである。

#### 3.1. VTR の印象評定

先に述べたように、VTR の内容のうち「1 回生へのメッセージ」は他の VTR と比べて直接的なメッセージ性が高く 1 回生に与える印象が質的に異なると考えられる。そこで「1 回生へのメッセージ」VTR を、在学生や卒業生（その職場での活躍を含む）の姿を映した他の VTR（これらを VTR 「その他」<sup>1</sup> とする）と区別し、それに「ゼミ風景」の VTR をあわせて、計 3 つ（「1 回生へのメッセージ」「ゼミ風景」「その他」）それぞれの VTR について、視聴後に全 11 項目 5 段階で印象を評定させた。このうち「ゼミ風景」のみ A・B・Mixed の 3 つのプログラムで共通する内容であったため、これに対する全被験者の回答データをまとめて、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、「励まされた」「誇らしかった」などの 4 項目からなる「誇り」因子、「不安になった」「落ち込んだ」などの 3 項目からなる「不安」因子、「面白かった」「やる気が出た」などの 4 項目からなる「やる気」因子がそれぞれ抽出された（川上他，2010）。

次に、因子分析に基いて構成された 3 つの下位尺度得点を算出し、これらを従属変数、3 種類のプログラムを独立変数とする 1 要因の分散分析を VTR の内容ごとに実施した。その結果、「1 回生へのメッセージ」については「誇り」因子 ( $F(2, 137)=4.776, p<.05$ ) と「やる気」因子 ( $F(2, 137)=6.124, p<.01$ )、「その他」については「やる気」因子 ( $F(2, 137)=8.013, p<.01$ ) で有意差が認められ、いずれも Mixed が呈示された群の得点が低くなっていた。つまり、Mixed の VTR はあまり良い印象を与えなかった可能性があ

る。

一方で、3 つのプログラムに共通する「ゼミ風景」に対する印象の比較を行うと、「やる気」因子において Mixed 群の得点が有意に低いことも明らかとなった ( $F(2, 136)=9.120, p<.01$ )。このことから単に Mixed の効果が低いのではなく、コホート差の影響も少なからずあったことが窺える。

#### 3.2. 大学生生活充実度および帰属感の変化

川上他（2010）では、2009 年度プログラムを対象として、プログラムの前後で大学生生活充実度および帰属感に変化が見られるかどうか、調査時期 (2)×プログラム (2) の 2 要因混合計画の分散分析を大学生生活充実度尺度<sup>2</sup> 各下位尺度得点（川上他，2007）を従属変数として実施している。その結果、「フィット感」において交互作用が 10%水準の有意傾向であった ( $F(1,60)=2.975, p<.10$ )。単純主効果検定の結果、プログラム A において 10%水準でプログラム前よりも後のほうが値が高まる傾向が見られた（図 1）。また、「不安」において調査時期の主効果が 1%水準で有意であり ( $F(1,60)=18.233, p<.01$ )、プログラム後に不安得点が高まることが示された。帰属感尺度についてはプログラム前後の変化はなかった。

一方、川上他（2011）では、2010 年度プログラムである Mixed を対象として、プログラムの前後で大学生生活充実度および帰属感に変化が見られるかどうか、SoULS-21（奥田他，2010）の 4 つの下位尺度および帰属感尺度得点を従属変数として  $t$  検定を実施した。その結果、帰属感尺度の得点がプログラムの前より後に 5%水準で有意に高くなっていた（図 2： $t(61)=2.46, p<.05$ ）。しかし SoULS-21 の 4 つの下位尺度については全てプログラム前後の有意な変化は認められなかった。

#### 3.3. 3 種類のプログラムの比較と考察

以上のような 3 つのプログラムの効果の比較をまとめると、次のようになるであろう。

- 2 大学生生活充実度尺度は、その短縮版が 2010 年に SoULS-21 として開発された（奥田他，2010）が、その開発段階で因子名が「フィット感」から「大学へのコミットメント」に変更された。2009 年度の測定では大学生生活充実度尺度、2010 年度では SoULS-21 が使用されているため、2009 年度の分析結果に挙げられている下位尺度名称が現行のものとは異なるが、これらはほぼ同じ内容のものである。

1 「その他」の内容は、プログラム A では在学生・卒業生のコメントであり、プログラム B では卒業生の活躍風景、プログラム Mixed ではその両方を含んだもの、ということになる。

まずプログラム A は B に比べて、大学へのフィット感を高める効果を持っていた。すなわち VTR として卒業生の活躍よりも在校生・卒業生のコメントを呈示する方が、1 回生の大学へのフィット感を高めたということである。逆に、職場で活躍する卒業生たちばかりを呈示しても 1 回生は大学に自分が合っているという感触を持たないことになる。

またプログラム A と B において、実施後に不安得点が高まる傾向が認められた。一方、プログラム Mixed では不安得点は変化していない。また、プログラム Mixed は帰属感を高める効果を持っていた。これらのことから、VTR として在校生・卒業生のコメントと職場で活躍する卒業生の映像を適宜ブレンドした刺激が、肯定的な効果をもたらしたと考えられそうである。

ところが、VTR の印象評定の結果自体は、プログラム Mixed に対する評価が A や B に比べて低くなっている。つまり、プログラム Mixed を体験した 1 回生たちは、在校生や卒業生（職場での活躍を含む）の VTR にあまりよい印象を抱けなかったのにもかかわらず、プログラムを体験して不安が高まることなく帰属感が高揚した、ということになる。

このような一見矛盾した結果になった理由は、プログラム Mixed においてのみ教員の鼎談を含めて、プログラムの効果測定を行なったことに起因すると考えられる。プログラム A・B では VTR 呈示後／教員の Talk（鼎談）前に質問紙の測定を行なっている。それゆえ、鼎談を含まない VTR 単独の効果として、卒業生が職場で立派に活躍する姿を視聴すると、ただ不安が高まり（おそらく「自分はこんな先輩のようにしっかりやっていけるだろうか」といった不安だと推測される）、在校生や卒業生の学生生活等に関するコメントを聞くと、大学へのフィット感が高まるものの、同時に不安をも覚えてしまうという結果が生じたのではないだろうか。しかし VTR だけでなく、教員が鼎談の中で自らの学生生活を振り返りつつ 1 回生と同じように心理学を学ぶにあたって様々な思いや考えを抱いていたことを自己開示的に語ったことが、1 回生の不安感を抑え、帰属感を高めるという全体に肯定的な効果をもたらしたと考えられる。

この点についてさらに詳しく検討するため、2010 年度プログラム（プログラム Mixed）直後に 1 回生に自由記述をしてもらったプログラムに関する感想（69 件）を分析した。そのうち、「先生」あるいは「先輩」という記載があった記述を抽出したのが、表

4 である。69 件の記述のうち、「先生」の記載が見られたものが 12 件、「先輩」の記載が見られたものは 10 件であった。また、これらのうち、「先生」と「先輩」両方の記載が見られたものが、6 件であった。「先生」の記載が見られた感想はいずれも先生およびプログラムに対してポジティブな印象を記述したものであった。

このことから、プログラム Mixed に帰属感高揚の効果が得られた要因として、教員の鼎談の効果が大きかったことが窺える。

また、「先輩」の記載のあった記述からは、卒業生が卒論が大変であることを強調していたことが、一回生の不安につながっていることが窺われた。

表 4 2010 年度「心理学と私」に対する感想（「先生」あるいは「先輩」という記載のあったものを抽出）

「先生」の記載のみあった感想(6件)
"楽しかった""来てよかった"と思える学生生活にしたい。A先生はすごくミーハーなんだな、と。(笑)もう少し後ろの席に座れば良かった。私が専攻したい分野はなんだろう…?
A先生が、車好きなのが意外で一番びっくりしました。私は大学に入ったきっかけが心理学を学びたい、じゃない理由なので今しんどいなと思うけどがんばろうと思った。
先生のお話がよかったです。私は臨床心理士になりたいと思って、この学校に来たんですが、色々、授業を受けて、大学院まで行けるか不安になったんですが、そのことは、ゆっくり考えようと思いました。
先生たちも最初から「心理」に興味あったわけじゃなくて、なんとなく、とかで心理学を学んだってことを知れて少し安心した。
先生方のお話がおもしろかったです。先生同士で話しているのを初めて見た気がします。仲が良いんだなあと思いました。
生徒と先生の仲がとても良いということを改めて感じた。前で先生たちが話している様子から先生同士も仲が良いのだと思った。
「先生」「先輩」両方の記載のあった感想(6件)
先輩や先生方たちの話を聞いて、がんばろうと思った。
先生たちの貴重な話さけてよかったです。そして、先輩たちのメッセージもきけてよかったです。
先輩達のお話や先生たちのお話が聞けてよかったです。
B先生を初めてみました。勉強することも大事だと思うけど、こうやって先生や先輩の話を聞くことも大事だと思ったので、楽しかったです。
高校の時に考えていた心理学と今では少し変わりましたが、高校生の時以上にもっと学んでいきたいと思うようになりました。それは今日の授業でもっと思ったし、受けられて良かったです。卒業生や先輩、先生の話を聞けてもっと学んでいっばいっていきたくと思います！
先生や先輩の話を聞いて、改めて樟蔭はアットホームな学校だということが分かりました。私はこの雰囲気为学校が好きなのでこの4年間、友達との時間や心理学を勉強することを大切にしたいと思いました。
「先輩」の記載のみあった感想(4件)
映像の中で先輩が言っていた、卒業論文について不安度が上がりました。一回生の基礎が大事であるのは分かるのですがやっぱり難しいです。
先輩方からの様々な意見ありがとございました！
4年後の事とか不安だったし、部活やサークルに入っていないので先輩がいないので話を聞いて良かったです。
心理学とは私たちが生きていく中で切りはなすことのできないことだなと思った。私も先輩方みたいに楽しいことが出てくるのかな？とおもった。

#### 4. 今後の帰属感高揚プログラムの開発にむけて

これらの結果から、教員の鼎談の効果があることが窺われた。これをさらに確認するためには、今後鼎談

に対する評価と効果測定を行う必要があるであろう。

また一方で、先輩インタビューのビデオ映像の効果は不安定なものであることが明らかになった。先輩インタビューのビデオ映像の効果をより安定したものにするためには、先輩達の違う姿を見せることが必要なかもしれない。たとえば、回顧的なメッセージではなく、先輩達が実際に成長する姿を見せることで、一回生が教育効果を実感することによって、帰属感が高まることも考えられる。筆者らは現在、この方向で、映像を採取している過程にある。

#### 引用文献

- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮 (2004).  
個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3) - 出身校, 居住形態との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 3, 57-68.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮 (2007).  
大学生活充実度における学年差に関する研究 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 71.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮 (2009).  
新入生オリエンテーションに関する研究 (5) 大学における所属学科への帰属感高揚プログラムの開発に関する探索的研究 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 1282.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮 (2010).  
大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 1212.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮 (2011).  
大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 (2) 日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集, 322.
- 奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2003).  
個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2) - personality との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 73-82.
- 奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010).  
大学生生活充実感に関する研究 (1) 4 年度分の調査データに基づく大学生生活充実度尺度の短縮版の作成 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 397.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩 (2005).  
オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩 (2007).  
新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 45-54.
- 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之 (2003).  
個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) - オリエンテーションに対する態度の基礎データ - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-72.
- 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之 (2008).  
新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について (2) 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 47-56.

\* 本研究は 2008 年度から 2010 年度の大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の助成を受けて行われたものである。